

【十一月の言葉（令和四年）】

いただいた命をていねいに

幼い頃から手を合わせる事が大切です

りょうあん たかし

（埼玉県 了安 峻さん）

何のために生まれてきたのか、死んだらどうなるのか……ある程度の年齢になると誰もが考えることです。

若い頃は「欲」や「競争心」が刺激になって人間を向上させていくかもしれませんが、歳をとって欲を出したら嫌われるだけです。「自分で人生を切り開いてきたつもりが、実のところは、見えない力に引つ張られてきた」「生きていることも、死ぬことも、自分の意志ではない」と思うと少し気が楽になるのではないのでしょうか。

親鸞聖人の「死んでからではなく、信心の定まるときに往生が定まる」というお言葉を知ったときはうれしかった。生きているときから浄土への道が保証されている、阿弥陀さまにおまかせすればいいという安心感は、人生の支えになります。

子どもの頃は、祖母に連れられてよくお寺参りをしました。私がかんな風に生き方を変えることができたのも、幼い頃の経験があつたことが大きいと思います。小さい頃から仏さまに手を合わせる経験が大切だと感じます。今、孫たちに、私がお仏壇の前でお参りする姿を見せることができてよかったと思います。孫たちも進んで仏さまに手を合わせてくれています。

（「六十五歳からの仏教」より）

